
最強の姉妹！

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の姉妹！

【Nコード】

N2246V

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

女性スタントマンの姉妹の前に現れた、いとこの後藤五郎。彼はとんでもない話を二人に持ちかけてきたのだが…。

(前書き)

誤字、脱字等あるかと思いますが、ご了承ください。

作…青木弘樹

白鳥レイラ…28歳・身長153センチ・姉

白鳥マイ…25歳・身長160センチ・妹

後藤五郎…30歳・レイラたちのいとこ・現在、無職

真下あらし…24歳・レイラの彼氏

竹野内源太…70歳・金持ち・女好き

「はあ？」

レイラは顔を歪ませた。マイは落ち着いていた。

「頼む！助けてくれ！」

五郎は必死だった。

「なんでそんなことしなきゃいけないのよ！まったく！」

土下座する五郎を見下しながら、レイラは言った。

「このままじゃ俺は殺されちゃう！」

五郎は涙目だった。

「五郎さん、借金くらいで殺されやしないわ」

マイは優しく話しかけた。

「つかさ、殺されてもいいじゃん。悪いのはあんたなんだから」

レイラは冷たかった。

「そんなこと言わないでくれよお」

レイラの足にしがみつく五郎。

「触るな変態！」

レイラは五郎を蹴った。

「ね、姉さん…」

マイは優しくいった。とはいえ、困ってはいた。

五郎はサラ金に500万ほど借金があるらしい。いや、借りたの

は200万ほどだが、いつのまにか利息が膨れ上がり、気づいたときには500万になっていた。

そこで五郎は親戚であるレイラとマイに、あることを頼みに来た。それは…泥棒だった。

五郎は昔、庭師の仕事をしていたのだが、ある時、とある金持ちに仕事を依頼され庭の手入れをしていた。その金持ちのじいさんは70歳で一人暮らし。家の金庫には現金が保管してあるという。それを盗み出して欲しいというのだ。

「だからさー、あんた何考えてんの？犯罪だろまったく…」

「最後まで聞いてくれよ。そのじいじいのこと色々調べただけでさ、これが悪い奴なわけよ。当たり屋って知ってるか？」

「当たり屋？」

「ああ。車でわざと事故って金とる奴。そのじいじいはそんなことやって金持ちになったんだよ。他にも色々詐欺をやっていたって噂がいくつもあるんだぜ」

「…」

「なっ。頼むよ」

しかし五郎はなぜ女性にこんなことを頼むのか。それはレイラとマイが女性スタントマンだからだ。二人は日本でも仕事をするが、時にはアメリカ・ハリウッドで仕事をすることもある。

五郎は二人の運動能力に目を付けて頼みに来たのだ。ぶっちゃけ情けないやつである。ちなみに五郎は現在は無職。

「だいたいあんたさ、庭師の技もってんならそれで金稼ぎやいいでしょ？」

レイラはいいところを突いた。

「いや…それがさ…」

「…？」

五郎は言いづらそうだったが、やがて話し始めた。

「実は…その金持ちのじいさん家で…その…」

「あんたまさか…」

「いや、仕事中じいさんがちょっと出かけたんだよ。その時に…」
「金庫開けようとしたんでしょ？」

「そ、そう！その通り！」

五郎はクイズ番組の司会者のようにレイラを指差した。

「指を指すな」

レイラは冷たく言った。

「それで仕事クビになって…なんとか警察には言うのだけは勘弁してもらったんだけど、口止め料払わされて…」

「まったく…あんた馬鹿でしょ？」

「ちよっと金庫触ってただけなんだよー。しかもその噂が広がってどこも雇ってくれないし…」

「当たり前よ、ねえマイ」

「そ、そうね…」

さすがのマイも、これにはフォローすることはできなかった。

「だってさあ…」

「だってでもヘチマもない。あんたが全部悪いの。知らないわよ！」

「…」

五郎はしょんぼりしていた。

「そうか…分かった…」

だが五郎は開き直ったように顔を上げた。

「仕方ない。これを使うしかないな」

「？」

そう言うと五郎はある写真を出した。

「！！」

「ちょ…！」

レイラとマイはその写真を見て驚いた。

「ふふふ…」

五郎は微笑した。その写真には夜、怪しげな店の前でバニーガールの姿で笑顔で手を振るレイラとマイの写真があった。

「おまえら…3年くらい前、ここでバイトしてたろ？」

「!」

レイラとマイは少し焦った。

「この店はな、表向きはただのキャバクラだが、実は裏で売春も幹
旋してたんだよ。去年、摘発されて店はもうないけどな」

確かにレイラとマイは生活のため、その店で1年近く働いていた。

「…」

「いいのかなあ…これをバラしても」

五郎は勝ち誇っていた。

「わ、私たちは売春なんてしてないわ」

マイが言った。

「お前らがしてなくても、こういう店で働いていたことが仕事の関
係者にバレたらやばいんじゃないのかなあ？」

「…」

レイラは五郎を睨んでいた。

「な、なんだよ…」

五郎は正直びびっていた。レイラは五郎に近づきながら言った。

「ねえマイ、こいつ…ここで殺^やっちゃおうか…」

「ね、姉さん…」

レイラは拳をパキパキ鳴らした。

「お、お前そんなことしたら…も、もっとやばいぞ!」

「どうせ、あんたなんか仕事もしてないし一人暮らしだし、誰も探
しゃしないわよ」

「ね、姉さん…冗談でしょ？」

「…」

五郎は蛇に睨まれた蛙のように動けなかった。

”サッ”

レイラはその写真を五郎から素早く取り上げた。

「まったく…」

”ビリッ”

レイラは写真を破った。

「そ、そんなことしたって：写真のデータは：う、家にもあるんだからなっ！」

五郎はこの後に及んで強気だった。と言っても涙目だったが。

「：」

レイラはさらに強く五郎を睨んだ。

「そんな睨まないでくれよ。可愛い顔が台無しだぜ」

「うるせえよ」

レイラは冷たかった。

「：」

マイも呆れていた。

「まあまあ二人とも、分け前はやるからさ、いいだろ？」

「当たり前よ。分け前くれなかったらやるわけないでしょ！」

「お！やってくれるのかい？」

「姉さん!？」

「マイ：私たちのスケジュールどうなってる？」

「え？そうね：とりあえずここ3ヶ月は仕事なかったわね：」

「そうなのか？」

五郎がちよつと嬉しそうに言った。

「そう。社長の話だと来月には仕事あるかもしれないけど、まだ分からないわ」

「そうね：」

「なんだあ、お前らも金に困ってたんじゃない。ちようどよかった：」

”ゲシッ”

「ぐわっ！」

レイラは五郎の顔を蹴った。

「うるさいんだよ。お金には困ってねえし。一緒にすんな」

「ご、ごめんなさい」

五郎は倒れたまま謝った。

「：」

マイは苦笑いだった。

「それで、ひとつ聞きたいことがあるんだけど」

「姉さん、本当にやる気なの？」

「五郎さん、金庫の暗証番号は分からないの？もし忍び込めたとしても金庫を開けられなかったら意味ないわ」

「へへへ：それが分かるんだよなあ」

「ほんとに!？」

「はい」

五郎は得意げに携帯電話で撮ったある写真を見せた。

「へへへ、相手はじいさんだ。忘れてもいいように、暗証番号をメモしてあって、押入れの奥にそのメモ帳があったんだ。これがその写真さ」

画面には達筆で『金庫・76573』と書いてる写真があった。

「…」

レイラとマイは驚いていた。

「へへへ、転んでもただでは起きない男、後藤五郎。やるときやるんだぜ」

「はいはい」

レイラは聞き流した。

「家は山奥にあってな。人里離れているから、やりやすいはずさ」

「…」

レイラは考えていた。

「ね、姉さん：ほんとにやるの？」

マイは乗り気ではなかった。しかしマイは姉には色々面倒を見てもらっているのも、もし姉がやると言ったらやるしかなかった。

「五郎さん、明日また来て。その時に返事をするわ」

「へ？やってくれるんじゃない？」

「こんなこと、簡単に返事できるわけないでしょ！今日は帰って。明日また来て」

「そ、そうか。分かった。じゃあ、また明日くるよ」

「…」

五郎は帰っていった。

「姉さん…」

「7時前か…。マイ…お腹すいたね。ご飯作るから」
「…？」

30分ほどしてレイラは野菜炒めとポテトサラダを作り、食卓に並べた。

「さ、食べましょ」

「う、うん」

二人は食事を美味しくいただいた。レイラは料理が上手だった。時々マイが作るときもあったが、ほとんどはレイラが作っていた。

「ごちそうさま」

食器を片付けるレイラ。

「姉さん、洗い物は私が」

「そう。ありがとう」

マイは食器を洗い、姉に問いかけた。

「姉さん、ココア飲む？」

「うん。ありがとう」

マイはココアを作り、持ってきた。

「はい」

「ありがとう」

二人はココアを一口飲んだ。外は風もなく穏やかな夜。三日月が雲の切れ間から町を照らしていた。

「ねえマイ」

「なに？」

「実はね…私…1ヶ月くらいまえに…彼氏ができたの」

「本当？よかったじゃない」

「うん」

「ねえねえ、どんな人？」

「ん…彼は…ミュージシャンなの」

「ミュージシャン？」

「もちろん、今目指してる最中なんだけど…」

「そうなんだ」

「それでね、楽器とか機材とか、練習するのにスタジオ借りるとか、いろいろお金がいるみたいなの」

「…」

「ライブするときはライブハウスも借りなきゃいけないし…」

「バイトとかは…してないの？」

「一応してるけど曲作ったりギター練習したりがあるから、そんなに日数入ってないみたい」

「そっか…」

「だから…彼を助けてあげたいし、それにスタントマンの仕事なんて…ずっと続けられるものでもないし…」

「…」

「もしマイが嫌なら…私一人でも…」

「それは駄目よ！」

「マイ…？」

「姉さんは親代わりになってずっと私を育ててくれた。姉さんがやるなら私もやる」

「マイ…」

二人の両親は10年ほど前に交通事故で死んでいる。それ以来、レイラとマイは二人で頑張って生きてきた。時にはくじけそうになった時も姉妹力を合わせて生きてきたのだ。

翌日。

昼過ぎ。無職の五郎が二人のところへ来ていた。

「さてと…で、どうするんだい？お二人さん」

「五郎さん…」

「へへへ…」

五郎は当然やってくれればいいと思った。

「五郎さん、悪いけどお断りするわ」

「え!？」

五郎は驚いた。マイも驚いた。

「ね、姉さん？」

「私一人ならやつてもかまわない。けど、私がやるならマイもやる。マイは…巻き込みたくないの。たった一人の大切な妹だもの」

「姉さん…」

「レイラ!？話が違うぞ!」

「悪いけどあんた一人で頑張って」

「そんな…」

「…」

「なら…あの写真…」

五郎はおそろおそろ脅迫しようとしてみた。

「写真がなによ? あんな写真、今の時代なら合成でいくらでも作れるわ。誰も信じやしないわよ」

「ぐ…」

五郎は痛いところを突かれた。

「姉さん…でも彼氏が…」

「しっ!」

マイは思わず余計なことを言ってしまった。

「ん? 彼氏がどうしたって?」

「あんたには関係ない」

「へへへ…俺の情報網を甘く見るなよ、お二人さん」

「!？」

「レイラ、お前の彼氏、真下あらしって言うんだろ?」

「!!!…なんで…知ってるの!？」

「俺の友達がバンドやっててな、その友達の友達がやってるバンドのドラムやってる奴が、真下あらしのバンドのドラムやってる奴の弟なんだよ」

「ややこしわね…」

マイが言った。

「あー関係性はどうでもいい。とにかくお前の彼氏がバンドマンだ
って知ってるってことさ。お金に困ってるってこともな」

「…」

レイラは一瞬、五郎から目をそらした。

「金かかるよなあ、音楽ってやつはさ」

五郎は見透かしたようだった。だがニヤけていた顔は次の瞬間、
真剣になった。

「なあレイラ、やろうぜ。どうせ相手はじじいで悪い奴だ。これは
チャンスなんだよ。俺にとっても、お前らにとっても、お前の彼氏
にとっても」

「…」

レイラは五郎を見た。

「姉さん…」

「…」

レイラは優しい目でマイを見た。

「姉さん…やりましょう！」

「!!」

レイラは驚いた。

「姉さんと一緒なら…私、怖くないわ」

「マイ…」

「俺もついてるしな！」

「…」

レイラは五郎を軽く睨んだ。

「う…」

五郎は少しだけ構えた。

「分かったわ…やるわ」

「そこなくっちゃ！」

「けどあんたも手伝いなさいよ」

「分かってるって！」

五郎は笑顔で親指を立てた。この能天気さは長所でもあり短所でもある。

「じゃあ、ちょっと準備があるから、そうだな…来週の夜、決行だ」
「分かったわ」

「じゃあな」

五郎は軽快な足取りで帰っていった。

レイラとマイは不安もあったが、どこか楽しみにしているところもあった。スタントマンをやるくらいの二人だ。やはり心のどこかで刺激を求めているのだろう。

数日後。

「ふう…」

ミュージシャンを目指す真下あらしは居酒屋でのバイトを終え、帰宅していた。真下は現在24歳。ハタチの時、突然音楽に目覚め、ギタリストとしてミュージシャンを目指している。

「あらし…」

午前3時の真夜中にレイラは現れた。

「レイラ…こんな時間に…」

あらしは驚いていた。

「ごめん。連絡もなしに。急に会いたくなって…」

「そうか…ありがとう。嬉しいよ。俺も会いたかったし」

「あらし…」

レイラは真下にベタ惚れだった。

「レイラ、来月またライブするから仕事じゃなかったら来てくれよな」

「うん、もちろん。でも…大丈夫なの、お金？」

「ああ。お金は要らないんだ。知り合いの、そのまた知り合いのバーなんだよ。その人音楽が好きで小さなライブならできるように店をちよっと改装してあるらしいんだ。なんでも昔自分も音楽目指してたとかで、俺らみたいな奴を見ると応援したくなるんだってさ」

「そう。それはよかったわ」

レイラは笑顔だった。五郎には見せたことのない女らしい仕草だった。

「最近、曲作りも調子いいし、期待してくれよな」

「うん」

「女性ファンが増えたからってヤキモチ焼くなよ」

「もう：あらしったら」

「ははは」

二人は幸せそうだった。

「あのね：あらし、今度ギャラのいい仕事取れそうなの」

「ほんとに？」

「まだ分からないけど：仕事取れたらお金のこと：少しは手伝わせてね」

「レイラ：」

レイラの話はもちろん嘘だ。泥棒を仕事というなら話は別だが。

「レイラ：すまないな。けど出来るだけ自分で何とかするから。どうしようもなかったら：助けてもらおうよ」

「うん」

あらしもレイラのことは本気で好きだった。だからこそ出来るだけ迷惑はかけたくなかった。

そして：決行の時は来た。

「よし！いよいよ今日の夜だな」

自信満々の五郎。

「で：どういう段取り？あんだ、もちろんちゃんと計画しっかり考えてきたんでしょね？」

「もちろんさ！」

「ほんとに大丈夫かしら」

マイが言った。不安げなマイだが、実はなかなか芯のある女性だった。スタントマンをしているのである。根性なしではやってはい

けないだろう。

「じゃあ説明するぜ！」

五郎の説明はこうだった。

まず、マイが健康サプリメント会社の営業社員を装って訪問する。そして世間話などで引き伸ばし、その間に裏からレイラが忍び込み金庫の金を盗む。五郎は友人に借りた車で近くで待機。もちろん友人には泥棒のことなどは話していない。

「ふーん」

「シンプル・イズ・ベスト！大胆にストレートにいったほうが物事は成功するもんさ」

「よく言うわよ、借金まみれのくせに」

「ははは、借金があったからこの計画が生まれた。そしてみんな大儲け。そういうことさ」

「はいはい」

二人のやりとりを見てマイはなんとなく感じていた。レイラと五郎は案外凸凹コンビで合っているのかもしれない、と。

「これがガラスきりだ」

五郎はガラスきりを出した。コンパスのように丸く切れるやつだ。

「へえ…実物は初めて見たわ」

「けっこう高いんだよな、これ」

「それと…これマイちゃんの衣装。営業社員用のスーツ。ちょっと着てみてよ」

「分かったわ、五郎さん」

マイは隣の部屋に行った。

「んでもって、これがだいたいの見取り図。金庫はここにある」
見ると金庫がある位置に×印が書かれていた。

「ふーん…」

「ここの塀を登ってここの窓から侵入して、ここを通れば最短コースだ。時間にしたら数分さ。きっと大丈夫」

「あんた…もしかしたらひとりでもやる気だった？」

「ん…？かもな。分かんないけど」

「…。あ、でも監視カメラとかあるんじゃない？」

「監視カメラは玄関に一台だけあった。あとは大丈夫」

「ふーん…なかなかバッチリじゃない」

「まあな。ほれたか？」

「ばか。調子に乗るな」

「へへへ、あとこれ」

それは黒い全身タイツだった。それと黒いゴーグル。

「なんだか…漫画みたいね。ルパンとか、ああいう…」

「漫画ならうまくいなくてもギャグで済むけどな。これは真剣勝負だ」

「…」

五郎はふざけてるようで真剣だった。レイラは少しだけ見直した。あくまでも少しだけ。

間もなくして、そこへマイがゆっくりやってきた。

「あのー、五郎さん…」

「おっ、サイズ合ってるかい？」

「合ってるけど…これって…」

「!？」

レイラは驚いていた。その紺色のスーツは胸元がぱっくり開いており、超ミニスカートだった。

「いいねー。かわいい子は何着ても似合うなあ」

五郎はニヤけていた。

「おいこら」

レイラは五郎の耳を引っ張った。

「いててて…な、なんだよ」

「なんだよ、あのミニスカート。あんたの趣味か？」

「違うって。離してくれよ。あのじじい、いい歳こいてすげえスケべなんだよ。だからエロい格好したほうがいいだろ。多少、物音がしてもマイちゃんに夢中で気づかなくなるしさ」

「…」

マイは少し恥ずかしそうだった。

「ったく。男ってしょうがないわね」

「男をだますのも女の生きる道のひとつだぜ」

「…」

レイラは呆れながらも、どこか納得している部分があった。ただ大事な妹を餌にしているようで抵抗はあった。

「んでもってこれがその健康サプリメントの入ったボトル。中身は通販とかで売ってるやつで、ボトルはガムのやつ。それでもってこのパッケージ俺が作ったんだぜ！パソコンで！すごいっしょ？」

「はいはい。すごいすごい。パチパチパチパチ」

レイラは適当にあしらった。

「さてと…じゃあ腹減ったし飯作ってくれよ」

「はあ？」

「苦労したんだぜ。情報を集めるのも。アイテムを集めるのも」

「アイテムって何だ？ゲームじゃねえよ」

「まあまあ、とにかく飯作ってよ、なっ？」

「分かったわ。マイ、さっさと着替えなさい。五郎さんに変なことされる前に」

「え、ええ…」

「変なことなんてしねえよ、大事ないとこなのにあ」

「大事なら泥棒なんてやらすなっつーの、ったく…」

ブツブツ言いながらもレイラは食事を作りに行った。マイは着替えに行った。

数十分後、待っている五郎とマイのもとへレイラが食事を作り持ってきた。

「はい」

レイラとマイにはパスタ、五郎にはオムライスだった。

「お！オムライス！これ好きなんだよなあ」

「ガキ…」

レイラがポツリと言った。

「いったきまーす」

三人は食べ始めた。食事中、会話はほとんどなかった。それぞれいろいろ考えているようだった。外は天気も良く、今日一日、雨の予定もない。三人は落ち着いていた。

「ふう。美味しかった。ごちそうさま」

満足気な五郎。

「じゃあ、片付けは私がするわね」

「ありがとう、マイ」

マイは食器を台所に運んだ。

「ねえ五郎さん、その全身タイツ、試着しましょうか？」

「ん？これはいいと思うよ。サイズ合ってるはずだし、多少伸び縮みするし。レイラの身長153だったよな？」

「そうよ。よく知ってるわね…」

「そりゃあ知ってるさ」

「なんでよ？」

「前にスタントマン事務所のプロフィール見せてもらったじゃん」

「ああ…」

「マイちゃんが160だったよな」

「そうよ」

「見た目はレイラの方が妹っぽいよな」

「悪かったわねチビで」

「いやあ、俺はちっちゃいほうが好きだぜ」

「あんたに好かれても嬉しくないわよ」

「またー、冷たいなあ。まあ、そういうところもいいけど」

「はいはい」

仲がいいのか悪いのか分からない二人。そこへマイが戻ってきた。

「姉さん、五郎さんコーヒーでもどう？」

「ありがとう。いただくわ」

「お！いいね！マイちゃんは気がきくねー」

「ふふふ」

マイは笑顔でコーヒーを作りに行った。

「マイちゃんはいいい子だね」

「そうよ。あんたとは大違い」

「はっはっは！まあそりゃそうだ。俺は甘やかされて育ったからなあ」

「でしようね」

「けどさ…」

「？」

五郎は真剣な表情になった。

「もし…捕まりそうになったらさ…」

「…」

「お前らは逃げろよ」

「？」

「もしもの話さ。捕まるのは…俺だけで十分だ」

「…」

五郎は立ち上がった。

「ちよっとトイレ借りるぜ」

「え、ええ…」

五郎は時折まじめなことを言う。五郎なりに二人のことを想っているのだろう。

そして夜。時間は9時。三人はターゲットである竹野内源太の豪邸の前に車をつけた。

五郎は目立たないように黒いシャツに黒いGパン、レイラは黒い全身タイツ、マイはちよっとエロいスーツ、それぞれ準備は整った。「よし！いくぜ！」

つづく★

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2246v/>

最強の姉妹！

2011年7月27日03時27分発行